多島域フォーラム・シンポジウム

太平洋島嶼域における人と自然の共生

―学融的研究の試み―

グローバル化が進み、多くのものがあふれている現在、われわれは豊かな社会生活を送っているように見える。しかし、一方で環境問題の多発や生物多様性の危機など私たちは自然環境との新しい共生の仕方が求められている。

伝統的な社会では多くの場合自然環境と共生した生活を送ってきたが、現在は多くの社会でこの様なシステムは崩壊しつつある。しかし、太平洋島嶼地域にはまだ伝統的な社会経済システムが存在し、そこでは自然環境と共生した生活を現在も行っている。このような伝統社会をもう一度見直すことにより、新しい人と自然の共生システムを形成することができるのではないだろうか。

本シンポジウムでは太平洋島嶼における人々の自然との関わりについて、学際研究を越えた学融研究という視点から、今後の自然とのかかわりについて考えます。

入場は無料でどなたでも参加できます。

日時：平成 20 年 2 月 23 日（土）13：00－

場所：鹿児島大学総合教育研究棟 2 階

プログラム　　司会：　寺田竜太（鹿児島大学水産学部）

13：00－13：05　開会のあいさつ　桑原季雄（鹿児島大学法文学部・プロジェクト部会長）

13：05－13：15　趣旨説明　河合　渓（鹿児島大学多島圏研究センター）

13：15－14：15　基調講演「アジア・太平洋の *sato-umi* をめぐって」
秋道智彌（総合地球環境学研究所）

14：15－14：30　休憩

14：30－14：40　報告概要説明　河合　渓（鹿児島大学多島圏研究センター）

14：40－15：10　報告 1　「キャッサバ栽培からみるフィジー農村社会」
西村　知（鹿児島大学法文学部）

15：10－15：40　報告 2　「フィジー沿岸の海洋生態系と水産資源」
小針　統（鹿児島大学水産学部）

15：40－16：10　報告 3　「学融研究から見た人と自然の共生」
河合　渓（鹿児島大学多島圏研究センター）

16：10－17：10　総合討論
コメンテーター：秋道智彌（総合地球環境学研究所）
佐藤正典（鹿児島大学理学部）

17：10－17：15　閉会のあいさつ　八田明夫（鹿児島大学教育学部・交流企画部会長）

基調講演

アジア・太平洋の *sato-umi* をめぐって

秋道智彌（総合地球環境学研究所）

日本では、地域固有の人と海とのかかわりを考える上で、里海という考え方が提起されている。里海に代表される、海洋資源の共有制度や住民の自発的な参加を可能にする社会のしくみが資源の持続的な利用を可能にし、地域の力を育む重要な考え方であることが認識されるようになったのである。本講演では、東南アジアから太平洋にかけての地域における事例を元に、サンゴ礁海域の資源利用について、地域ごとに育まれてきた慣行やその問題点を指摘し、海外における *sato-umi* について考えてみたい。

とくに取り上げたいのは、サンゴ礁の資源を共有して利用する方式の意義と、外部からの経済的・技術的な影響による変化・変質の問題である。魚類のように移動する資源と、貝類のような底生資源とでは、管理手法に違いがあるのは当然である。また、管理を進める上での合意形成は社会や文化のあり方により異なるので、その異同性と歴史的な変化を明らかにすることもきわめて重要である。アジア・太平洋の *sato-umi* にわれわれはいったい何を学ぶことが出来るだろうか。

報告１

キャッサバ栽培からみるフィジー農村社会

西村　知（鹿児島大学法文学部）

本報告の目的は自然と人びとがバランスよく調和するフィジーの自給自足的性格の強い農村におけるキャッサバの生産、分配の現状を紹介することによって、商品経済化された社会に住むわれわれが人と自然の共生のありかたに対して何かを学び取ることである。

ナイカワンガでは、先住民土地委員会（ＮＬＴＢ）の制度を可変的に運用することによって自然資源を村人が有効に利用してきた（外部者の受け入れ、タンブナニュー）。そしてこの制度の可変的浸透性を可能としたのが様々な生活の場で欠かせないカバというフィジー特有の文化であった。

現代人が人と自然との共生に関してフィジー、ナイカワンガから学ぶことができるのは地縁を基礎とした人びとの可変的浸透性を可能とする制度の構築と合意の場の形成であろう。様々な世代、職業、価値観を持つ人々を一定の方向（行動）に導くための制度、またその制度が運用されるための場である。この「場」は新しく作るべきものあるいはその地域にもともとあった普通の多くの人びとが集まる場（例えば公民館、運動会、祭）の活性化、再生化によって生まれてくるであろう。

報告２

フィジー沿岸の海洋生態系と水産資源

小針　統（鹿児島大学水産学部）

南太平洋島嶼域の村落をモデルとして、海洋生態系と水産資源利用の特徴を把握し、この地域に独特な生態系に配慮した水産資源管理（Ecosystem based management）のありかたを模索した。この村落では、マングローブからサンゴ域に至る環境変化に富む海域を広く漁場としていた。単純な漁法でも多様な魚類・貝類が漁獲されており、貝類は年齢性別を問わず容易に利用できる水産資源であった。これら漁獲された魚類・貝類はこの村落で主なタンパク源となる重要な食糧資源であるが、村落内で消費・分配される魚類に対して、貝類は市場へ流通するので経済的価値の高い水産資源でもあった。これらのうち、村落で最も利用頻度の高い貝類について実験を行ったところ、漁場の生態系機能を健全に維持する能力を持っていることが分かった。複雑な海洋生態系を形成する太平洋島嶼域だからこそ、漁場の生態系にも配慮した水産資源管理が必要かもしれない。

報告３

学融研究から見た人と自然の共生

河合　渓（鹿児島大学多島圏研究センター）

近年では地球温暖化に代表されるように環境問題が大きく取りざたされるようになり、今後の人と自然のあり方が、あらためて問われるようになってきた。本報告では、上記２つの報告をもとに、フィジー沿岸域を対象にして人と自然の係わり方について検討する。また、本目的に対して、学融研究という考え方を用いて検討する。多くの地域研究では学際的研究方法がとられ、多様な学術的視点からひとつの地域を対象に研究がなされている。しかし、この場合においては一つ一つの研究において、その関連性があまり見られないことが多く、異なる視点の関連性について議論することが難しかった。これに対し、私たちはそれぞれの研究成果を金銭化するという方法を用い、同じ単位を使うことで異なる視点（海洋生物学・海洋学・経済学）の成果を融合し研究を行った。

本シンポジウムは科学研究費基盤 C（南太平洋島嶼国にみられる伝統的社会における人間と自然の共生システム：課題番号 17510206）の研究成果をもとに行っています。
関連ホームページ：http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/project-fiji.html